
<シンポジウムを受けて>

誰が何を教えるか

木田 祐司

20数年前私が学生だった頃、一般教育は極めて評判が悪かった。マスコミにも、大学へ入ってさあ専門の勉強をしようとして張り切っている学生に高校の授業の繰り返しでは意欲を失うのも当然だ、という論調がよく載ったものである。学生も格好の口実をもらってこれ幸いと授業をサボっていたものだった。私の場合も一般教育の授業はまったく興味を持たず、かといって専門の準備の授業にも燃えることはできずクラブ活動に明け暮れ、留年というゴールに向かってまっさかさまに転がり落ちて行くのであった。

さてそういう怠け学生の実態はともかく大学改革は一般教育の廃止が大きなテーマのはずであった。しかしその実現が遅すぎたために建前だけでも勉強しようと言って入学してくる学生が絶滅してしまったのである。そのため専門教育の拡充もできず一般教育の廃止は空白地帯を生み出すことになってしまった。立教では一般教育部は解体されたものの新たに全カリ運営センターが作られ一般教育が引き継がれこの危険は回避された。しかし全学が一般教育を分担して行い、学部とは別組織

の全カリ運営センターが管理・運営を行うという二重構造を作り出し、種々の矛盾を生じさせることにもなった。もっとも言語やスポーツに関しては専門家集団が形成され学部教育には影響を及ぼさないようになっている。この小文ではそれ以外の人文・社会・自然などの総合教育についてのみ考察することにする。

—私が一般教育のできること—

私の専門は数学である。数学科以外の学生に教えたことは前任校で医学部の学生に線形代数(連立方程式関係の科目)を1年間担当したことと短大の女子学生にコンピュータの入門授業を2年間行ったことだけである。短大の授業はほとんど派遣のインストラクタになったようなものであって、素直だが複雑な乙女心が勉強になったのが唯一の収穫である。また医学部の学生は数学科の学生よりも数学ができるのであるし、内容も数学そのものであったからこれも経験にはなっていない。一般の総合大学であると理科系と呼ばれる学部を複数持っている。一般教育の数学はたとえば工学部の学生に応用の基礎

となる標準的な数学を教えることとなり、新たな授業開発の負担は非常に小さい。ところが立教の場合、理科系学部は理学部だけであって他はすべて文科系の学部である。工学部があれば理理学部が赤字の元凶と叩かれることもなかったのと思うと残念ではあるが主題と違うことを愚痴っていても仕方がないので止めておこう。

そういう事情で授業の対象はいわゆる文科系の学生に限られてしまうのである。経済学部などの学生が対象ならばその後の応用を学部の授業に期待して教科書的な内容で済ませることができ。おそらく私はこういうところで自分なりの味付けをした授業をすることしかできないであろう。しかしその授業だけで完結したものが要求された場合には何を演じれば良いのかと考えるとハタと困ってしまうのである。最近数学書が売れているというので書店に行きリストの中の一般向けの啓蒙書を見てみるとほとんどパズルの世界であって、数学の精神を伝達するものではない。もちろん数学の精神などというものは数学科卒業生でも何%がそのかけらでさえも身につけているかと心配になるようなものであって、半年の授業で伝達するのは土台無理なことである。ここで私は大上段に振りかぶることは止めてパズル的なトピックスの中にかかにして数学の精神の香りを付けるかという難問に挑戦することになるのである。この解決には大変な労力が必要となりとても専門の授業をしな

がら準備し教えられることではない。これに対して専門の授業はまだ容易である。なぜならほとんどの授業はそれだけで完結することはなくメッセージは専門の授業全体で伝わるようになってからである。それが系統だったカリキュラムである。一般教育の授業の場合は90分10数回の中で一定のメッセージを伝達しなければならないのである。

—総合Bについて—

現在の全カリ総合教育の目玉は総合Bであり、これを発展拡充して行くのが全カリの枠組みを作った人たちの方針のようである。総合B自身がすばらしいものかどうかは始まったばかりで判断することは難しい。私はアラカルト的に総合Bが行われることは大いに評価するものである。しかしこれで総合Aを代替しようという考えには賛成することはできない。何の脈絡もなく提案されるテーマが羅列されること、最初の熱気が薄れ演し物のネタもつきた2順目3順目にはかなり質が下がるであろうことなどが理由である。今のところはこういう問題はなく、拡充論が力を持っている。"良いものであるからどんどんやりましょう"という議論にはなかなか抵抗ができないものである。全体を見通してコントロールする組織があれば良いが、そうでない場合にはそれぞれの立場で最善のものを求めてしまう。体に良いことであっても無計画にいろいろのことを試したのではか

えって体に悪いということの類似になりかねない。今回の大綱化により、授業の改革を行っているのは一般教育だけではないのである。専門の授業でも大幅な改革を行って、従来から惰性で流れてきた授業を新しいものに変えて行く作業が進行している。一般教育は一般教育で、専門は専門で、それぞれに最善と思われる道を選ぶと大変な負担となってそれぞれの教員に降りかかってくるのである。現在は旧一般教育部の教員が総合Bのかなりの部分を担当しているので影響は少ない。しかし総合Bの授業数が倍増するような事態になれば専門教育への影響は大変なものとなるだろう。

— 一般か専門か —

一般教育と専門教育のどちらに重きをおくかについては意識の違いがある。寺崎氏の言葉を借りれば"専門を持った教養人"か"教養を持った専門人"かである。多分に言葉の遊びであり遙か彼方にある理想の人間の話ではあるが刺激的な主題をオブラートに包む効果はあるだろう。寺崎氏の真意は単に、一般教育にもっと力を入れましょうという程度の控えめな主張なのであろうが、ここではダイレクトに反応してしまおう。私は断然、教養を持った専門人を選ぶ。専門教育では最近4年間では不足であって、さらに2年間の大学院教育が必要であると語られている。一般教育でも本当に確かなものを教えようとすれば専門以上の時間が必

要であろう。実際、大学に専門教育は必要ないと主張する人もいてそれはそれで理解できる。私自身は政治・経済の基本的な勘所以外は一般教育的なものを授業で教えて欲しいとは思わない。自分の内面に他人の手が入ってくるような気持ちの悪さを感じるからである。授業というのは多かれ少なかれマインドコントロールである。

そういう個人的な趣向を離れても重要なのは専門の授業である。少なくとも学生はその道を選んで入学してきている。とはいえ大多数の学生は確たる根拠もなく模擬試験の成績で選んでいるのであって今では選択に自信を失っているかもしれない。しかし観念はしているであろう。我々はこの学生の付託を受けて、専門家に育て上げなければいけないのである。専門の授業は今でなくては集中して勉強することはできないし、組織立った授業を受ける環境も二度と手に入れることはできないのである。一般教育の勉強には社会に出てからでもいくらでも手段はあるし、むしろその方が幅広く質の高いものが得られる。また経験を積み年齢を重ねて初めて理解できることが過半を占めるであろう。そして重要なのは自分のセールスポイントを持つことである。もちろん学業以外のところで優れた調整能力を身につけたり、広い人脈を作ったりした人はそちらの方がすばらしく大学はそういうものを作るための場であったというのは大いに結構である。しかし多くの学生にとって身に

つける一芸はやはり専門に勉強したものであろう。

—教員の意識の違い—

私は全カリ運営センターの委員をしているので旧一般教育部の教員と意見を交わす機会が多くある。そこでの議論は何か噛み合わず違和感を覚えることが少なくない。まず私と違って授業をすることに積極的である。自分の担当するものだけでなく自分が関係している分野の授業を増やすことにも熱心でもある。組織防衛の匂いがすることもあるがそれだけではとても説明がつかない。授業の総合化に熱心なものも旧一般教育部の教員である。これは一般教育部がその名の通り一般教育を専門に行っていたこととそこが各分野混合の総合教育に適した環境であったからだろうと想像する。本当に授業の総合化が理想ならばそういう環境を作らねばならない。今の状態は総合化という理念からは大変な後退であると思う。これからはどんどん専門教育の方に比重が移って行くのであろう。それによって一般教育が形骸化していくことを避けるためにはやはり専門の教員集団が必要ではないだろうか。

—将来の枠組み—

現在は新しい体制がスタートしたばかりで、また新たに組織の改変をするようなときではない。しかし将来的にはどうすべきか実現の可能性をあまり考えずに自由に考えてみる。

経済学部で亀川氏は学部の授業を他学部の学生が聴講することを提唱されている。断片的な授業を孤立して提供するより、体系的な授業展開の中から選択してもらうことを目指しているものであろう。問題は自由意志でなく義務で聴講に来る他学部学生が授業を壊してしまわないかということである。これを理学部数学科で同じようにできるかという専門の学生でさえ音を上げる授業を他学部の学生が理解できるとはとても思えないし意味もない。結局、それ専用の授業を用意しなければならなくなるであろう。もちろん分野別・学部別に異なる対応があっても良い。

しかしそうなったとしても授業の実行主体と管理主体が一致しているためにオーバーワークを避けることができるのは利点である。この場合全カリ運営センターは各学部主催の授業の内容とコマ数に注文をつける機関ということになる。

もう一つの案は対称的に全カリの独立化である。構成員は学部からの4年程度の出向という形をとることにする。出向してきた教員は全カリの授業を8割、籍のある学部の授業を2割程度受け持つことにする。そして独立した教授会を組織して運営を行うのである。これが基幹となる授業の責任を持ち、学部からアラカルト的な授業の提供を受けて全体のカリキュラムを構成する。こうすれば一般教育に専念する集団を形成し、またそこに常に新しい

空気を吹き込むことができるであろう。

— 結 論 —

結局のところ私の心配は一般教育，専門教育の共倒れである。全員が一般教育も専門教育も担当するということ

は一見正しく美しい。しかしそのことがかえって負のスパイラルに全員を巻き込んで行く危険性を私は感じてしまうのである。

(きだ ゆうじ 本学理学部教授)